喜びのみなもとなる神　　ルカ 2:15〜20

今日はアドベント第三主日を迎えております。３番目のキャンドルを灯しますがこれは「羊飼いのキャンドル」と呼ばれ、テーマは「喜び」です。いったい羊飼いたちは、何を喜んだのでしょうか？
それは第一に自分の救い主を知る喜びです。羊飼いは御使いを見たので喜んだのでしょうか。いいえ、御使いたちが現れた時、羊飼いたちは「ひどく恐れた」とありますから、御使いを見たことではありませんでした。御使いは驚き、恐れている羊飼いに「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。」ルカ 2:10-12 と言いました。「あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。あなたがたは、…飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。」御使いのメッセージは、羊飼いに、救い主が、他の誰のためでもない、あなたがたのために生まれたのだと語っています。羊飼いたちは、自分たちの救い主が生まれたとの知らせを聞いて喜んだのです。

聖書の時代、羊を連れて野山を歩き回っている羊飼いたちは、安息日を守らず、神殿に礼拝に行くこともせず、また、会堂で律法を学ぶこともしない、低級な人々、救いからほど遠い人々だと考えられていました。聖書に「取税人や罪人」という言葉が何度か出てきますが、羊飼いたちもそのカテゴリーの中に入れられていたのです。しかし、救い主は神殿の祭司たちのためにでも、会堂で律法を教える学者たちのためでもなく、本当に救いを必要としている人々のために、羊飼いのような人たちのために生まれてくださったのです。ダビデの町、ベツレヘムでお生まれになった救い主は、飼葉おけに寝ておられるというのです。もし、救い主が神殿で生まれたなら、羊飼いたちは、簡単には救い主を見ることはできなかったでしょう。救い主が王宮に生まれたとしたら、羊飼いたちは、そこに近づくことすらできなかったでしょう。しかし、救い主は飼葉おけに寝ておられるというのです。飼葉おけがあるところ、それは、羊やヤギ、ロバや牛をつなぎとめておく、家畜小屋です。羊飼いにとって家畜小屋ほど勝手の知ったところはありません。飼葉おけほど見慣れたものはありません。羊飼いたちは、救い主は、他の誰のためでもない、自分たちのために生まれてくださったということを、御使いのメッセージによって知りました。羊飼いが大きな喜びに満たされたのは、自分たちの救い主が生まれたという知らせを聞いたからでした。

イエス・キリストはすべての人の救い主です。しかし、「キリストは全人類の救い主である。」というだけでは、それは私の、あなたの喜びにはなりません。「キリストは私の救い主です。」ということが本当に分かる時、私の、あなたの心は本物の喜びで満たされるのです。最近、よくパーソナライズという言葉を聞きます。訳すと「個人化」となるでしょうが、どんなものでも自分好みに変えてしまうことを言います。自分の名前のシールを貼ったり、もっと手の込んだことをする人もいます。「パーソナライズ」することによって、自分の持っているものをもっと大切にし、誇ることができます。そのように、みなさんは、イエス・キリストを「パーソナライズ」しているでしょうか。人の証しを聞いてなかなか良い証しだとか、イマイチだと評価している場合でしょうか？信仰とは、キリストを「私の」救い主とすることです。「私の主」「私のイエス様」と呼べたらどんなに幸いなことでしょうか。そしてそれはなんと喜びに満ちたことでしょうか。

羊飼いたちの喜びは、第二に、飼葉おけに寝ている救い主を見つけ出した喜びでした。誰でも、何か大切なものを見つけ出した時は大変うれしいものです。大切なものの中でも最高に大切なもの、救い主を見つけ出した羊飼いの喜びはどんなだったろうと思います。御使いは、羊飼いに、救い主を見つけ出すのに十分なヒントを与えました。ベツレヘムの町はそんなに大きな町ではありません。その夜、そこで生まれた赤ちゃんが何人もいるわけはありません。まして、家畜小屋の飼葉おけに寝かせられている赤ちゃんといえば、マリヤが産んだ赤ん坊以外にありません。ですから羊飼いが救い主を見つけることははっきり言

って難しいことではありませんでした。それだけのことが分かっていれば羊飼いにとって、救い主を見つけたも同然でした。しかし、なお、実際に救い主を見つけるには、ベツレヘムに向かわなければなりませんでした。救い主がどこに生まれたかを知っていることと実際にそこに行って見つけることとは別です。誕生の時は馬小屋の飼葉おけに寝かせられていたでしょうがそこで何日もゆっくりするわけには行きません。つまり羊飼いは、御使いの声を聞いたその時、すぐに、ベツレヘムの町に走って行かなければ、救い主を見つけることはできなかったのです。彼らはみ使いの声を聞いて、「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう。」と言って動き出したのです。「よく分かっているからそのうちに」とは言いませんでした。

同じように、神は、私たちにも、立ち上がってベツレヘムに向かいなさい。救い主を探し、見つけ出しなさいと言っておられます。しかし、それは難しいことではありません。救い主への道は、暗号を解き明かさないと分からないような謎めいたものでも、頭の良い人だけが分かるような哲学的なものでもありません。神は、聖書に、誰にも分かるように、救いの道を示しておられます。「イエス・キリストが私の罪のために死に、私を滅びから救うためによみがえられたと信じるなら、誰でも救われる。」と聖書は教えています。なのに、なぜ、多くの人が救い主を見出すことができないのでしょうか。それは、神のことばという地図に従わずに、自分勝手に探し求めているからです。もっと道徳的になれば、宗教的になれば、救いを見出すことができる、教会で数多くの奉仕活動をすれば、たくさんの献金すれば、それで天国に場所を確保することができるなどと思いこんで、救いに至る地図を自分勝手に作り出しているからなのです。そうではなく、聖書が示している救いへの道に従いましょう。幼な子のように悔い改め、信じ、あわれみを求めて、救いを得ましょう。救い主を見い出しましょう。

神は、あなたの遠くにおられるお方ではありません。救い主は、あなたのすぐそばに、手の届くところにおられるのです。神は言われます。「あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。」エレミヤ 29:12-13　主イエスも言われます。「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。だれであれ、求める者は受け、捜す者は見つけ出し、たたく者には開かれます。」マタイ 7:7-8　あなたは、このクリスマスに、救い主を 「わが救い主」と告白するために何をしたら良いのでしょうか？個人的な救い主を見出す喜びを味わっていただけたらと思います。

第三に、羊飼いたちは救い主を直接その目で見て喜びました。羊飼いたちが御使いを見たこと、天に現れた神の栄光を見たことだけでも、すごいと思うのですが、羊飼いは、それよりももっと偉大なものを見たのです。神の使いではなく、神そのもの、神の栄光の現われでなく、人となられた神を見たのです。

私たちは、イエス・キリストがこの地上を歩まれた時から二千年後の時代にいて、羊飼いのようにイエス・キリストを直接見ることはできません。しかし、私たちはみことばの中で、今も、生きておられる私たちの主キリストに出会うことが出来ます。キリストの外側の姿を見ることがなくても、キリストのお心の中を見ることができるはずです。わたしは人を深く知るとはどういうことなのかと考えることがあります。確かに目に映るものがどういうものであるかと言えばこの人は背が高い、低い、少し太っているとか言えるでしょう。そう言ったことを突き詰めて、この人の右手の人差し指は長いとか、右目は乱視であることを知っていてもその人を深く知ったことにはなりません。むかし神戸におります時に関盲宣（関西盲人宣教会）から依頼を受けて奉仕したことがあります。目の前にいる方々はほとんど目が不自由というということで、私の姿格好は分かりません。だからこそ見えるごまかしは通用せず、直接、私の心の奥深くを見られているのではないだろうかと思い、非常に緊張していたことを思い出します。

「神がいるなら見せてみろ。私の目の前に現れたら信じてやろう。」などと言う人がいます。確かにもっともな意見です、しかし果たして目に見えることだけがその人を知ることになるのでしょうか？ むしろ目に見えない心の中、思いや考えのほうがその人自身を表しているということにならないでしょうか？　今、私たちは羊飼いのようにイエス様を見ることは出来ません。しかし、みことばを通してイエス・キリストの御心、つまり思いとお考えを知ることが出来ます。その意味において私たちも、神のことばに導かれて、救い主に出会うことができるのです。御使いが「恐れることはありません。」と語りかけたよう、神のことばを聞く者は、恐れなく主にお会いでき、喜びに満たされます。羊飼いたちが「喜びの知らせ」に聞き救い主を見たように、私たちも、みことばに聞き、私たちの主を見るものとなりましょう。そして喜びに満たされたいと思います。